



序

文に曰く、浮世は夢の如し、歡をなす事いくばくぞやと。誠にし
かり。金々先生の一生の榮花も、邯鄲の枕の夢も、ともに粟粒一
炊の如し。金々先生は何人といふ事を知らず。おもふに古今三鳥
の傳授の如し。金ある者は金々先生となり、金なき者はゆふで
ゝ頓直となる。さすれば金々先生は一人の名にして、一人の名
にあらず。神錢論にいはゆる是を得る者は前に立ち、これを失
ふ者は後にたつと、それはこれを言ふかと云々。

晝工 戀川春町 戲作



文子曰く浮世の如く夢の如く一飲をち壽事
生る累花も即乾のまづの憂もまた一
粟粒もいのか金々先生は何人か
傳はる也金ある者ハ金に先生と名を
金あるよりいふゆゑ頼直といふことも
金に先生ハ一人の名は多くその名が人
神談論するもの星も多し其の末にも
うたと云ふことはいふは後にもいふは是れ
さふりと云ふ画工 恵川春町戯作

夢華榮生先々金

今はむかし片田
舎に金村屋金兵
衛といふ者あり
けり。生れつき
心優にして浮世
の樂しみを盡さ
んと思へども至
つて貧しくして
心に任せず、よ
つて熟々思ひう
き、繁華の都へ
出て奉公を稼ぎ
世に出て思ふ儘
に浮世の樂しみ
を極めんと思ひ
立ち、まづ江戸
の方へと志しけ
るが名に高き目
黒不動尊は運の
神なれば、これ
へ參詣して運の
程を祈らんと詣
でけるが、早
も夕方になり、
いと空腹になり
ければ名代の栗
餅を食はんと立
ち寄りける。
抑目黒不動尊は
靈驗者しく通く



諸人の知る所なり。本章は慈覺大師の作にして、龍泉寺といふ。此所の名産栗餅并に餅花といふものあり。竹を割りて華蓋の如くに結び、これに赤白黄の餅を花の如く付けるなり。よつて餅花といふ。何ても江戸へ出て、番頭株とこぎつけ算盤の玉はづれをしこたま山と出かけて者を窮めませう。もしもし、も早何時で御座りませうの、何なりと頼みます。」「あい、大方晝過で御座います。せう、奥へお通りなさります。」



金兵衛空腹の餘り、栗餅屋の奥座敷へ通りけるに折しも栗餅はまだ出来合せずしばし待ち居るそのうちに旅の勞れにやすこい睡氣萌しけるまゝ側に在り合ふ枕引き寄せずやすや思はず夢にどろみける夢に何處ともなくほふせん寺の御免駕籠を釣らせ、黒鴨仕立の草履取、十一二の小僧其外手代番頭夥しく召し連れ、年配の男社村の櫓を正し、威儀をつくろひ申しけるは、抑われは神田の八丁堀に年久しく住む致す和泉屋清三と申す者の



家來なり。然るに主人清三段々老衰致し候處、いまだ一子なし、殊に今年剃髮致し名を文ずいと改め候、よつて跡式譲るべき人もがなと尋ねる處に、幸此度君は世を望み給ふ由、主人年頃信心致す所の萬八幡大菩薩の告にまかせ、これよりわかれ來りたり。主人文ずいの望にまかせ給へと無理かのほふせん寺駕籠に打乗せ何處ともなく伴ひ行くこそ不思議なり。金兵衛思ひも寄らざる事いと不審に思ひけれどもこれ幸福徳の三年餅、天へも上る心地して、即ち駕籠にうち乗りていづこを當てともなく出ゆきける。『嬉しやく、漸く若旦那を探し出したぞ。』



金兵衛かの駕籠
 にうち乗り行く
 程に、程なく和
 泉屋の門に至り
 ぬ。やがて駕籠
 より出し番頭手
 代前に立ち伴ひ
 ゆくこそその住ひ
 の結構さ、まこ
 とに玉の階、瑠
 璃の帷とも調つ
 べき有様、屏風、
 襖には金銀の砂
 子を並べ、衝立
 には黄金の日輪
 をかゝせ、唐紙
 には白金の月輪
 を現はしたり。
 程なく主の老翁
 清三立出で喜び
 の眉を開き即ち
 金兵衛にわが名



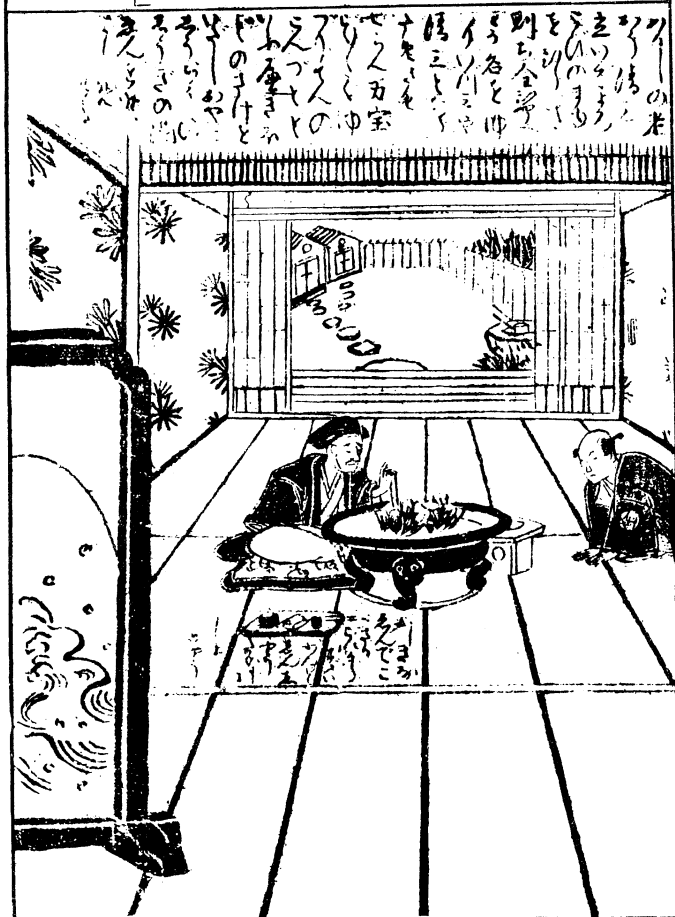
夢華榮生先々金

を譲り、和泉屋
清三と改めさせ
七珍萬寶悉く譲
り、天の濃漿と
もいふべき程の
酒を出し、親子
主従の祝儀の酒
宴をぞはじめけ
る。

「不思議な縁で
御座る。これ
から随分と身
上大事にしま
せう。」

「首尾よく御家
督相済みいか
ばかりめでた
う存じます。」

「今度の若旦那
はとんと雷子
が物草といふ
恰好だ。」



金々先生華夢

金兵衛家督を嗣
ぎてよりなに不
足もなければ、
段々奢に長じ、
日夜酒宴をのみ
事となし、昔の
妻は引かへて今
は頭も中割を贅
のあたりまで剃
り、髪を毛をば
鼠の尻尾位にし
て本田に結び、
着物は羽二重づ
くめ、帯は天鷲
絨または博多絨
風通、回々繰な
ど、出かけ、あ
らゆる當世の洒
落を盡せば、類
は友を以て集る
ならひにて手代
の源四郎、幫間
の萬八、座頭の
五市など心を合
はせ、こゝを先
途と唆しける。



その昔金村屋金
 兵衛なれば、そ
 の名をとりて諸
 人金々先生とも
 て囃しける。手
 を呼び集めて金
 々先生を唆す。
 「何と旦那、内
 てばかりの騒
 ぎは、とんとさ
 えませぬ。明
 日は北國へい
 き山とお出か
 けなさりませ。
 四谷アヤ、引
 新宿馬糞の中
 によ、女郎あ
 るとはつゆ知
 らず、きたき
 たきたさぬき
 の金比羅。
 おますところ
 が嵐雷子たし
 かかやうにか
 申しました。



夢華祭生々金

金々先生嘆され
ふと吉原へ行き
けるが、それよ
りかげ野といふ
女郎に馴染み、
親の異見も何の
その、一寸先は
闇の夜も、かの
手代源四郎萬八
をつれて、ひた
と歩みを運びけ
り。

金々先生の打扮、
八丈八端の羽織、
縮緬の小袖、
役者染の下着、
龜屋頭巾に目ば
かり出し、人目
を少し忍びけり。
「旦那のお姿ど
うもいひませ
ぬ。凄（こ）いひやう（う）く。」



金々先生傾城か
げ野にのぼり詰
め、今年も早
歳の暮、折節年
越の夜なりけれ
(ば)かの源四郎
がすゝめにて豆
は古しと金銀を
樹に入れ、節分
の祝儀を祝ひけ
る。

一福は内鬼は外
く。」

「これがあり蘇
山のとんび烏
これ持つて檢
校なり山と出
かけよう。」

「これはきびし
い薩摩やま源
五兵衛と来て
居る、とんと
梅が枝もどき
ありがく。」



金々先生北國の
遊もし盡しけれ
ば、これより辰
巳の里と出かけ
あらゆる才を盡
しけり。されど
も俄の洒落なれ
ばさしたるおち
の來る事もなし
ただ阿彌陀の光
も金ほどにて、
山吹色を播き散
す故皆金々先生
とても囃しける。
「あゝ降つたる
雪かな、世に



なき人はさぞ
寒からん。雪
は瑞毛に似て
飛んで散亂し
人は紙衣かみこを着
て川へはまら
うとア、まゝ
よ」

「この大雪にお
駕籠にも召し
ませず、加賀
義の御打おうち扮は、
ソレヨ辰巳の
里に猪牙しぐがはあ
れど君を思へ
ばかちはだし
といふ御趣向
おそろく。」

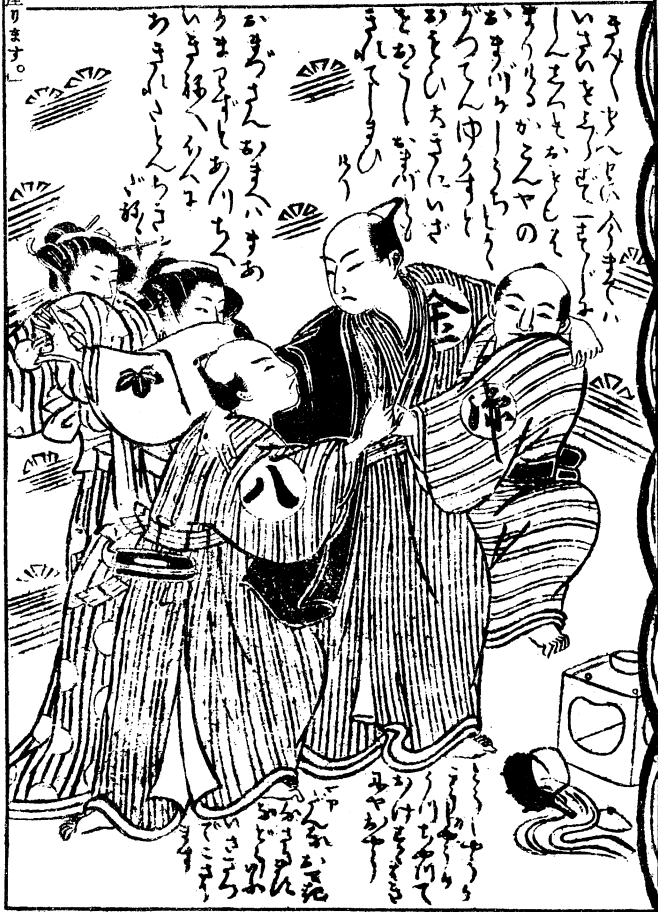


金々先生今までは委細を知らず、一筋に眞實とおもひ振りけるが、今夜のおまづが仕打兎角合點ゆかずと思ひ、大きにいざを起し、おまづとも切れてしまひけり。

「おまづさんお前はまあ構はずと、彼方へ行きねえ。ほんに呆れたとんちきだね。」

「どうせうが、斯うせうが、うつちやつておけ煤掃にや出よう。」

「マア旦那お急きなさいますな、どういふいきさつで御座ります。」



金々先生は所々にて大く嵌められ、今は最早光も失せ果て、日頃這ひ屈みし者も知らぬ振にて寄り附かず。無念至極に思ひけれども詮方なく今は四つ手にて押させる力もなく、漸くばつち尻藏折に桐の根下駄と出かけ、心細くもたゞ一人、夜な夜な品



川へ通ひける。

「昨日までは金

々先生と持て

囉され猪牙や

四つ手に乗り

し身が、今は

ばつちに日和

下駄、變れば

變る世の中ち

やな引ナニい

ま〜しい。」

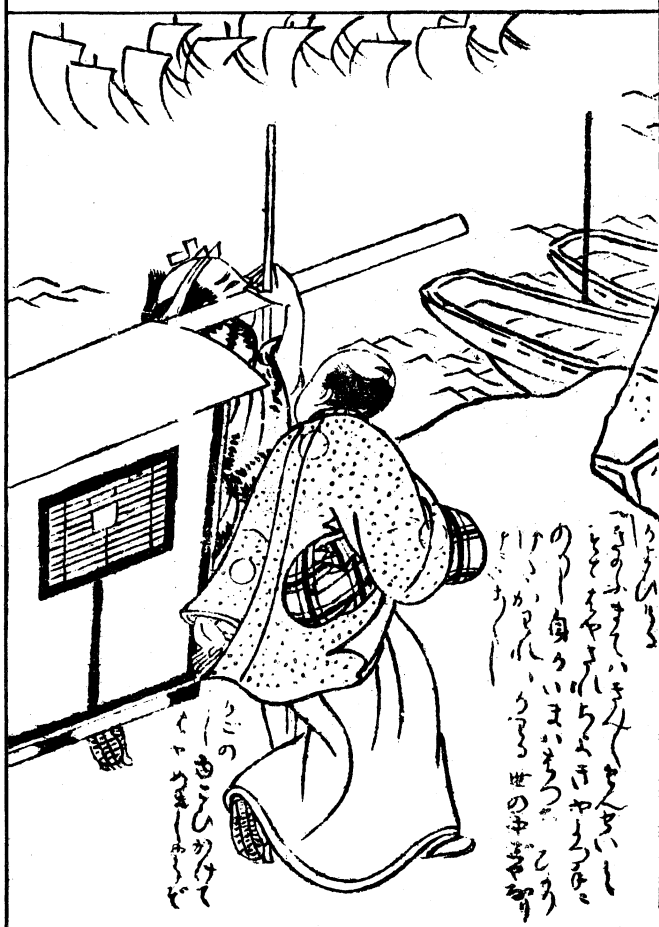
「駕籠の衆、こ

ひかけて早め

ませうぞ。」

「ぎやうにお江

戸は賑だ。」



金々先生日々金々先生に、
 審長じ、今は身代も斯うよと見えければ、父文
 ずい大きに怒り、手代源四郎が勸
 にまかせ、金々先生が衣類を剥き、昔の姿のまゝにて追ひ出
 ける。
 手代源四郎はじめ金々先生を唆し、多く金銀を遣はせ、その餘りは皆我が手へくすねける、よつて物を盗むことを源四郎とは申すなり。
 「ア、よい、感だ。」



金々先生追ひ出され、今は立ち寄るべき方もな
 くないかはせんと呆れ果て、途
 方に暮れて歎き居けるが、栗餅
 の杵の音に驚き、起き上つて見れば一炊の夢にして拵への栗餅未
 出来あがらず。
 よつて金兵衛橋手うち、我夢に文ずいの子となりて榮華を極めしもすでに三十年、さすれば人間一生の樂みも僅に栗餅一臼の内の如しとはじめて悟り、これより直に在所へ



未正月新目錄

繪師

鳥居清濤
鳥居清經

富突始

冊三

源家

鳥九

冊三

木朝

世帶道具

冊二

通水車智恵堂

冊三

朝奈建康報

冊二

新兒智恵海

冊二

一休悟孔母

冊三

鉦金紙屑

冊二

金生夢

冊二

三寶堂

冊三

新上康島貢

冊二

早稲

冊二

外善島器

冊三



板元

大傳馬三町目

鱗取屋

孫兵衛

沼浦新板物市歴、遠く山掛、古川、新上